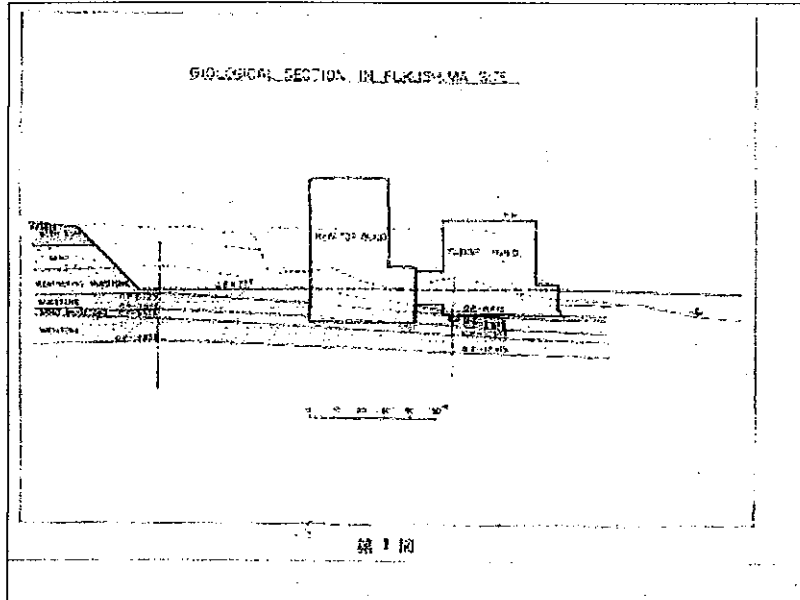


福島原発敷地は、以前、丘陵であった。山には樹が茂り谷川が海に向かい流れていた。原発を造るためにこの丘陵地帯の山を削り谷を削り、自然を壊して原発の敷地とした。

谷川を削ったために水みちが絶たれ、水は地下に潜り地下水となった。

工事で土を掘り、地下室を作ったが地下水豊富なこの地域、地下水は地下室に入り、このため、施設内の地下水を集め海に放流した。地下水放流は工事中も行なわれ、施設完成後、施設内の地下水を集め放流した、原発爆発後、地下水は放射能汚染地下水となり海に捨てた、今世界の耳目を集めている。



福島原発計画図

タンク、欠陥工事の数々

1. 山を削り樹木を伐採したなら各タンク毎に地盤支持力の確認をしなければならない。だが、地盤支持力の調査確認をしないでタンクを設置した。
2. 地盤支持力について判断の誤り。
日本建築学会・基礎構造基準では常時の地盤支持力は極限支持力の1/3としているが、東電は、極限支持力を常時の地盤支持力としている。判断の誤りをしている。
3. タンク底板とコンクリート基礎版との力の受け渡しの確認をしていない。
4. コンクリート基礎版は6mmの鉄筋、一重配筋であり強度はゼロに近い。
5. タンクには高力ボルトを使用している。建築基準法では、「接合面には異物を挟むことを認めていない」だが東電汚染水タンクはパッキングを使用している。建築基準法違反である。
6. 消防法では屋外タンクの構造基準を定めている。これによると、タンクの接合は溶接としている。ボルトは認めていない。

「隠蔽」

タンク、欠陥工事の数々「1～6は全て解明されないまま」。

この問題は「原子力規制庁、特定原子力施設監視・評価検討会 汚染水対策検討ワーキンググループ」において検討されたが、工事は上記1～6に反し行なわれた。

そして、これまで、https://www.nsr.go.jp/committee/youshikisyu/tokutei_kanshi_wg/ で会議録や資料を公開していたが現在は閉鎖している。何故か？

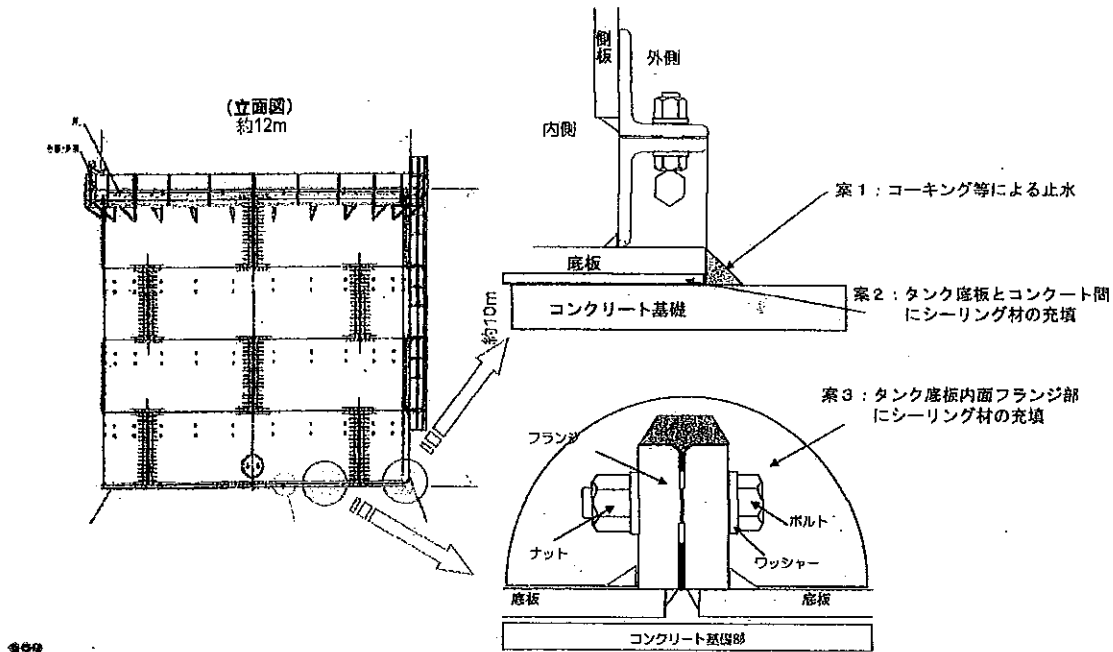
今も、汚染水を入れたまま欠陥汚染水タンクは残され、汚染水は漏れ続けているであろう。

全ての原発廃炉 東久留米 川井 満

福島原発で何が行なわれているか、私たちは知る必要がある。

放射能汚染水をこん 暫定対策で止める、デタラメに近い対応だ。全てのタンク、汚染水を抜いて工事をしたのか？

1.22 暫定対策イメージ



東京電力
無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

25

1.21 今後の対策について

- この図は、この対策のイメージを示している。
タンクの標準は？
設計図書は
- 漏えいの主要因は、(気温変化等によるフランジの熱膨張・収縮、タンク水圧によるパッキンの落下であり、ボルト等の間隙から当該隙間を通じて漏えいが発生したものと推定した。
 - 強化パトロール(線量測定)の結果から、現時点では漏えいは確認されていないが、本事象は、すべてのフランジで発生する可能性が否定できない。(TYPE-2~5は、底板を締結するボルト外側にコーティング等を実施。また、TYPE-3~5は、パッキンを切欠に設置。)側板は、タンク組み立て時の目視確認による取り付け不良の有無を確認しており、ボルトの増し締め等も行っていることから問題ないものとする。(底板は、組み立て後に直接確認ができておらず、同様の事象が発生する可能性を否定できないことから、以下の調査・検討を行う。
 - 底板フランジの止水構造(TYPE-2~5)ごとに代表1機の状況を確認する(タンク底部フランジ面の外観目視など)。
 - 底板フランジの止水状況確認結果を踏まえ、今後の対応の優先順位付け(同様な事象が発生した場合、漏えいするリスクが高いTYPE-1は最優先)を検討する。
 - 今後の対応としては、強化パトロールの継続実施に加え、溶接タンクへのリブレースまでの間、以下の暫定対策を検討・実施していく。なお、優先順位の高いものからALPSによる濃縮水処理を行う等も考慮する。
 - タンク底部のコーキング等による止水
 - 底板下部にシーリング材の充填
 - 底板部(内部)にシーリング材の充填

東京電力
無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

24